

山田詠美

ぼくは

勉強が

できない



新潮文庫



新潮文庫

ぼくは勉強ができない

山田詠美著



新潮社版

5648

べんきよう
ぼくは勉強ができない

新潮文庫

や-34-6



平成 八年三月一日 発行
平成二十三年四月二十日 四十刷

著 者 山^{やま}田^だ詠^{えい}美^み

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二一八七一
東京都新宿区矢来町七一
編集部(〇三)三二六六―五四〇
電話 読者係(〇三)三二六六―五一
<http://www.shinchosha.co.jp>

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・株式会社大進堂

© Eimi Yamada 1993 Printed in Japan

ISBN978-4-10-103616-8 C0193

目次

ぼくは勉強ができない	7
あなたの高尚な悩み	29
雑音の順位	51
健全な精神	73
○をつけよ	93
時差ぼけ回復	115
賢者の皮むき	135
ぼくは勉強ができる	157
番外編・眠れる分度器	177
あとがき	242

新潮文庫

ぼくは勉強ができない

山田詠美著



新潮社版

5648

目次

ぼくは勉強ができない	7
あなたの高尚な悩み	29
雑音の順位	51
健全な精神	73
○をつけよ	93
時差ぼけ回復	115
賢者の皮むき	135
ぼくは勉強ができる	157
番外編・眠れる分度器	177
あとがき	242

ぼくは勉強ができない

ぼくは勉強ができない

クラス委員長は、ぼくと三票の差で、脇山茂わきやましげるに決まった。彼は、前に出て挨拶あいさつをするために立ち上がった瞬間、振り返り、ぼくの顔を誇らしげにちらりと見た。相変わらず仕様のない奴やつだなあと、ぼくは思う。彼は、ぼくが忌々いまいましくてたまらないのだ。

「えー、皆さんに選出されて、委員長を務めることになった脇山です。まだ慣れないクラスの皆さんが、ぼくを選んでくれたことは、大変光栄で……」

光栄も何も。ぼくは、頼杖ほおづえをつきながら、ぼんやりと彼の挨拶を聞いていた。皆、彼の名前が、試験の成績発表で常に一位の場所に載っているから、書いただけだ。クラス委員長が誰になろうと知ったことではないのだ。それなのに、彼は、頬を紅潮させて、喋りまくっている。委員長をやると、進学に有利なのだろうか。あれ？ 大学受験に内申書なんてあったっけ。

★ クラス委員長を決める時期になると、ぼくは、小学校五年生の時のホームルームを思い出す。その時も、やはり、投票で委員長を決めることになっていたが、転校して来たばかりで、

あまり事情の解^{わか}っていないなかつた。ぼくは、教壇の前の席のおっとりとした様子の女の子の名前を書いた。なんだかやさしそうに見えたからだ。そのことが、まるで重大事件のように扱われるとは予想もしていなかったのだ。

開票が進み、その女の子の名前が呼ばれた時、黒板に向かつて、正の字を書いていた生徒は信じられないという様子で後ろを振り返った。クラス全員の子たちが、くすくすと笑い始めた。ぼくは、何がどうなっているのやら、さっぱり解らずに、あたりをきよるきよる見渡した。その瞬間、担任の教師は立ち上がり、大声で怒鳴った。

「誰だ！ 伊藤友子の名前を書いた奴は!？」

皆、くすくす笑うばかりだった。ぼくは、すっかり仰天してしまったのと、腕力の強そうな男の教師に怯^{おび}えたのとで、返事をする機会を失ってしまった。

「誰だか手を上げると言ってるんだ！ ふざけるにも程があるぞ!!」

ふざける？ ぼくは、混乱して、その言葉を頭の中で反芻^{はんすう}した。伊藤友子の名を書くことは、ふざけたことなのか？ クラス全員が委員長になり得る、そういうことから、投票で決めることになっていたのではなかつたのだろうか。

教師が怒鳴っている間、伊藤友子は、ずっと下を向いたきりだった。肩が震えているように見えた。ぼくは、小声で隣の席に座っている男子生徒に尋ねた。

「ねえ、どうして、伊藤さんの名前を書いちゃ駄^だ目^めなんだい」

彼は、迷惑そうに答えた。

「馬鹿だから」

その瞬間、教師は、ぼくたちに目を止めて、再び怒鳴った。

「そこ!! 何、喋ってる。もつと真面目にならんか!」

隣の生徒は、ぼくに向かって舌打ちをした。ぼくは、肩をすくめていた。教師は腹立たしげに音を立てながら、教室じゅうを歩き回った。

「先生は悲しいよ。皆に行動力をつけさせ、自立心を養うために、クラス委員長を選挙で決めるというのに。それをふざけた態度で、馬鹿にするとは。投票はやり直した。二度目は、自分の名前も横に書くこと。委員長、副委員長、書記、その横に、自分の名前を書いて、記入すること。解ったね」

「解りません」

教師の足が、ぼくの言葉で止まった。ぼくは、小さく呟いただけのつもりだったが、その反対を主張する言葉は予想外に響いてしまったようだった。教師は額に筋を浮き立たせて、振り返った。

「誰だ!! 今、解りませんと言った奴は!! 立て!」

仕様がなくぼくは立ち上がった。クラスじゅうが、ざわめいた。

「時田か。転校して来たばかりで、この学校のことを何ひとつとして解つたらんくせに。で、

どうして、解りませんと答えた？ それを説明してみなさい」

「だって、伊藤さんの名前を書いたのは、ぼくだからです」

一斉に驚きの声が上がった。信じらんない。そういう叫びにも似た声が、ぼくの耳に突き刺さった。

「……おまえだったのか。しかし、何故だ。転校して来たばかりとはいえ、誰を選んで良いのか、おまえにも区別はつくだろう。それとも、茶化してみたかったのか」

「そうではありません」

「じゃ、まだ友達が出来なくて、事情が飲み込めてなかったんだな」

「そういうんでもないです」

「じゃ、何なんだ」

「伊藤さんが、クラス委員長でも良いと思ったからです」

「なにい!？」

再び、笑いの渦が起こった。

「きさま、このクラスをなめているのか」

「なめてません。先生、どうして、伊藤さんでは駄目なんですか？」

教師は、言葉に詰まって唇を歪めた。

「……じゃ、おまえは、何故、伊藤が相応しいと思ったんだ」

「親切そうだからです」

誰もが笑い転げた。中には、机を叩たたいているものもいた。ぼくは、懽然がぜんとしたまま、教師をにらみつけていた。訳の解らない怒りが、ぼくの心に急速に湧わいて来たのだった。

「まあ、いい。時田は、転校生で何も解らんのだ。皆、投票をやり直す必要はない。どうせ一票ぐらい無効があったって、結果には変わりないのだ。丸山、残りのやつを開票しなさい。時田は座ってよろしい。今後、注意するように」

そうは行かなかった。ぼくは、伊達だてに、十一年間生きて来たのではないのだ。ここで引き下がるのは恥だ。ぼくの母は、いつも、格好の良い男になるのよ、と、ぼくを諭さとしてくれたのだ。

「先生は、ぼくの質問に答えていません」

「何？」

「どうして伊藤さんでは駄目のですか」

「……………」

「勉強が出来ないからですか？」

教師は答えなかった。ぼくを完全に無視したまま、丸山という前回の委員長に、残りの票を読み上げるよう促した。伊藤友子の名は、もう呼ばれることはなかった。ぼくは、仕方なく腰を降ろしたが、気持は暗かった。前に目をやると、机に伏せて鼻を嘔すっている伊藤友子

の姿が見えた。ぼくは、この時、初めて、大人を見くたすことを覚えた。

「それでは、副委員長は女子から、黒川さん、書記は、二番目に票の多かった男子と女子から一名ずつ、時田くんと、沢田さんになります」

ぼくは、我に返って黒板を見た。その前で、利発そうな女生徒が挨拶をしていた。額が綺麗きれいだなあとぼくは思った。まだ処女かなあ。十七歳。ぼくは、とうに、女と寝る経験をすませている。黒川礼子という女生徒のうなじや唇に心を奪われていると、いつのまにか、ぼくの名が呼ばれた。くすくすと笑い声が洩もれる。いつも、そうなのだ。ぼくが、何か行動を起こす段になると、女の子たちの好意的な笑いが周囲に巻き起こる。そして、ぼくは、それが大好きだ。

「時田秀美ひでみです。最初に言っとくけど、ぼくは勉強が出来ない」

生徒たちは笑い転げた。ぼくは、どうしてうけちゃうのかなあと呟かいて頭を掻いた。

「おまけに字も下手だ」

益々ますます、皆、笑い続けた。

「それなのに、どうして、ぼく、書記なんかになっちゃうの」

誰もやりたくないからよ、という声が飛んだ。ぼくは、その声の方を指差して言った。

「違う。ぼくが人気者だからだ」

担任の桜井先生が笑いながら、ぼくに言った。